

2024 年度年次報告書

パンデミックに対してレジリエントな社会・技術基盤の構築

2021 年度採択研究代表者

武見 綾子

東京大学 先端科学技術研究センター

准教授

感染症対応における国際・国内ガバナンス向上に関わる研究
—情報共有における異分野間連携と医薬品開発投資戦略に着目して—

研究成果の概要

育児休業から7月に復帰して研究にあたった。国際保健を題材に幅広く日本外交の意義を分析するとともに、第二次トランプ政権の方針やパンデミック条約の合意形成の進展を受けてこれを分析しつつ反映する研究に従事した。(1)トランプ政権によるWHO離脱を受けた安全保障上の同盟国間協力の重要性について、米国の安全保障関連業務従事者との連携等を通じ検討した。国際的な合意形成が困難となる中で、安全保障上の同盟国間の連携はかつてなく重要となっている。この観点から、QUAD(Quadrilateral Security Dialogue:日米豪印戦略対話)における協力関係の構築やCDC(Centers for Disease Control and Prevention:疾病予防管理センター)間の連携などを例にこれらの可能性について研究した。(2)日本の国際保健外交における戦略の特性について、いわゆる「国際的」と呼ばれる規制や体制を、より地域的な実情に合わせた制度に「翻訳」し、それによって国の一定の影響力を確保しようとする傾向を捉えた”Translational Strategic Listening”という概念を打ち出し検討を進めた。2023年G7広島サミットにおいては、日本の国際保健外交に関し、G7外の国々のニーズの聞き取りからの制度転用や、国際機関の積極的な利用が特徴的だった。(a)非西洋諸国のニーズや文脈を慎重に反映するとともに(b)これに対応した制度的デザインを行い(c)国益に叶うための外交上の戦略的なアプローチとする、という、より一般的に日本の外交上のアプローチへの含意のある特性を検討した。(3)昨年度に引き続き、異分野横断的情報収集におけるマネジメントの重要性について分析した。宇宙や海洋分野で先行するように、初期的な情報収集においては安全保障分野と非安全保障分野の区別が相対化される側面がある。一方、このような体制に対しては適切な分野間の独立性の維持と双方の専門性の融合的なアプローチを同時に可能とするようなマネジメントの視座が必要であることを強調し、このマネジメントの在り方について類型化を行った。